

2. 調査結果

2006年度の調査結果を表7-1、1995～2005年に得た分布資料を表7-2、アンケートによる分布資料を表7-3、7-4に、分布図を図7-2に示す。種名（和名）は千石（1979）、地名とその境界は市販の地図（昭文社、2005）、溜池の名称は宗像市の溜池リストおよびその付図に従った。

A. 各種の分布概要

福岡県レッドデータブックのカテゴリーを種名の後ろの（ ）内に示す。

(1) カスミサンショウウオ (福岡県 RDB : 絶滅危惧Ⅱ類)

従来知られていた確実な分布域は吉留・赤間・石丸・山田であるが、今回の調査により名残・大井・用山にも生息することが判明し、玄海地区では深田・牟田尻・池田および大島に生息することが確認された。旧宗像市の前回の調査と比べ、個体数にとくに顕著な減少傾向は認められなかった。本種の典型的な産卵場所は山間部の水田の浅い溝で、このような場所は昨今の減反政策により乾燥化が進んでいる。この状況が続けば今後消滅する個体群がでてくるものと予想される。

(2) ブチサンショウウオ

山地の渓流域を生息の場とする本種の探索は容易でなく、今回は積極的に調査しなかった。従来知られている分布域は陵巖寺(城山)と山田(金山)で、この地域の自然環境はほとんど変化していないから、おそらく現在も生息していると思われる。

(3) アカハライモリ (福岡県 RDB : 準絶滅危惧)

本種を目撃する機会はほとんどなく、今回の調査では吉留・用山・平等寺・池田・上八・大島の6ヶ所で確認されたにすぎない。アンケート調査では、このほかに名残・山田の分布情報が得られた。本種のおもな生息場所は年中水のある浅い池や溝で、このような場所はきわめて少なくなっている。

(4) ニホンヒキガエル (福岡県 RDB : 絶滅危惧Ⅱ類)

旧宗像市では前回同様、吉留・武丸・赤間・山田で生息が確認された。玄海地区では予想外に広くみられ、深田・牟田尻・池田・上八・大島・地島で発見された。しかし、個体数は決して多くない。卵塊や幼生は山間部の溜池に見られるが、地島では大きな池はなく、ごく浅い溝や水溜りで幼生が確認された。成体は産卵場所から広く分散して生活するから、周囲の森林が保全されるかぎり生存は保障されると思われる。

(5) ニホンアマガエル

ヌマガエルと並んでもっとも普通に見られるカエルである。大島・地島を含む宗像市全域に広く分布し、他のカエルと違って住宅地の植え込みにも比較的多く見られる。産卵は水田で行われるが、生活の場は周囲の森林やブッシュである。

(6) ニホンアカガエル (福岡県 RDB : 絶滅危惧Ⅱ類)

福岡県の絶滅危惧種に指定されているが、宗像市では比較的普通に見られる。ただし、大島・地島では産卵に適した場所があるにもかかわらず、発見できなかった。おもな産卵場所は山間部の溜池の浅い部分や溜池の下の溝、山間部の水田域の溝などで、成体は周囲の林内で生活する。旧宗像市では前回の調査箇所でも今回も確認でき、とくに減少傾

向は認められない。

(7) タゴガエル

山地のカエルで、宗像市では大穂南部と磯辺山で知られていた。今回の調査ではその中間の谷にも生息が確認されたほか、野坂の中山池の谷でも確認された。産卵は谷の伏流水でなされるため人目に触れることはないが、成体は水辺を離れて広く山地の森林で生活するから、山道で目撃できる。許斐山・新立山周辺の谷では発見できず、城山周辺の山地についても同様である。玄海地区では発見できず、おそらく分布していないと考えられる。

(8) トノサマガエル (福岡県 RDB : 絶滅危惧 I B 類)

今回の調査ではまったく発見できなかった。前回もわずかに1箇所を確認されたにすぎず、おそらく宗像市では全滅したものとみなされる。宗像市周辺でトノサマガエルが急速に減少しはじめたのは1975年頃のことである(倉本、2003)。県内でトノサマガエルが見られるのは山間部の水田域にほぼ限定され、もっとも顕著な衰退傾向を示している(倉本、2002)。大穂・平等寺・用山などで山間部に入り込んだ水田域があり、田植えの時期に本種を探す予定であったが、いずれも減反の対象域で、田に水が入ることはなかった。

(9) ヌマガエル

宗像市内いたるところの水田に見られる。かつて水田域に多く見られたトノサマガエル・ツチガエルが減少したのに対し、ヌマガエルが広く残っているのは、少量の水で繁殖・生存できるためであろう。本種は基本的に南方系のカエルであるから、日本での分布は西日本に限られていたが、最近は関東地方でも見つかっており、温暖化に伴って分布を広げた可能性がある(倉本・他、2002)。

(10) ツチガエル

宗像市では稀な種で、吉留・武丸・大穂で散発的に見出された。玄海地区では発見できなかった。幼生が水中で越冬するため、収穫が終わると水路が遮断される水田域では生存できなくなったと思われる。最近では山間部の谷でみかけることが多い。

(11) ウシガエル

各地の溜池やゆるい流れに見られるが、以前に比べてかなり個体数は減少している。かつてのように大きな鳴き声に悩まされることも少なくなった。幼体は移動能力が高く、水田域の水路や山間部の小さな水溜りでも見かける。アンケート調査で自由ヶ丘、日の里など、住宅地内の溜池にも生息していることが確認された。

(12) シュレーゲルアオガエル

従来知られていた分布域は、吉留から朝町にいたる新立山側の水田域である。今回の調査で吉留の戸田山側にも分布していること、名残では自由ヶ丘に隣接する場所にもいることが判明し、西は野坂の御木屋池南の谷まで生息していることが確認された。タゴガエルの場合も同様であるが、新たな生息地が見つかったことは分布が拡大したためではなく、調査の密度が前回の調査に比べて高くなっているためである。玄海地区では発見できなかった。卵塊は白い泡状で水辺の土の隙間に産み付けられ、成体は周囲の森林内で生活する。

(13) カメ類

今回大島でニホンイシガメの生息が確認されたが、これは宗像市で初めての記録と思われる。内陸側で目撃できたのはクサガメ（遠方であったため、同定はやや不確実）のみであるが、過去にはミシシippアカミミガメが山田（ほたるの里）、多礼ダムで目撃されている。ニホンスッポンの記録はない。海産動物は調査の対象外であるが、今年（平成18年）6月22日に神湊海岸でウミガメ（おそらくアカウミガメ）の卵が発見されたと報道された。アカウミガメは国の絶滅危惧Ⅱ類に指定されており（環境庁、2000）、貴重な記録である。なお、過去にはさつき松原（江口）および神湊海岸でアカウミガメの上陸や産卵が観察されている（倉本・石井、2003）。

(14) ヤモリ・トカゲ類

ニホンヤモリはもっぱら聞き込みによって分布情報を得たが、ほぼ市内全域に生息しているようである。アンケート調査の結果は、これを裏付けている。ニホンカナヘビを目撃する機会は予想外に少なかったが、各地の草むらのほか、宅地にも見られる。ニホントカゲの生息数は比較的少ないように思われる。沖ノ島にはニホンカナヘビとニホントカゲの生息が確認されており、それ以外の爬虫類・両生類はいない。

(15) ヘビ類

今回の調査で目撃されたヘビはアオダイショウ、シマヘビ、ヤマカガシ、ニホンマムシの4種で、なかでもシマヘビが圧倒的に多く（目撃したヘビ62匹中55匹：約90%）、ほぼ市内全域で記録された。シマヘビの黒化型（いわゆるカラスヘビ）は16匹で、約30%を占めていた。過去にはシロマダラ、ヒバカリが記録されており、これらの種は現在も生息していると思われる。タカチホヘビとジムグリの確実な記録はない。

地域ごとに各種の分布記録をまとめたのが表4である。市街地での記録は乏しいが、ニホンアマガエル、ニホンヤモリ、ニホンカナヘビなどはほとんどの団地で見られるはずである。

B. 調査重点地域の爬虫類・両生類

(1) 城山

福岡教育大学背後の溜池や谷にはカスミサンショウウオ、ニホンヒキガエル、ニホンアカガエルが生息し、過去には林道工事の際にブチサンショウウオが採取されている。爬虫類ではシロマダラ、ヤマカガシ、ニホンマムシなどの記録があり、植生等に人為的な攪乱はほとんどないので、おそらくこれらの種の存続に支障はないと思われる。

(2) 武丸周辺台地

奥の水田域にはニホンアカガエル、シュレーゲルアオガエルが産卵し、花瀬池にはニホンアカガエルのほかニホンヒキガエルも産卵する。また、奥の水田の溝でツチガエルが確認されるなど、比較的両生類相は豊富である。爬虫類の情報は少ないが、おそらくいろいろな種が生息していると思われる。

(3) 名残の谷地田

ニホンアマガエル、ヌマガエルのほか、カスミサンショウウオとシュレーゲルアオガエルが生息する。これは今回の調査で初めて確認された。この地域は自由ヶ丘と葉山の市街地に囲まれており、今後とも自然環境に大きな変化のないよう、積極的な保護が望まれる。

(4) 許斐山

山頂付近の金魚池には、過去に多数のカスミサンショウウオが生息していた。今回、2度にわたって調査したが、成体・卵塊とも発見できなかった。2回とも池に水が乏しく、この水位の低下が一時的なものかどうかは不明である。福津市側の山麓部にはカスミサンショウウオがいるが(福間町民生部、2000)、宗像市側の山麓部にはとくに特徴的な種は見つかっていない。

(5) 釣川中流(上)

両生類はニホンアマガエルとヌマガエルのみで、とくに希少な種はいない。爬虫類ではシマヘビが記録されている。

(6) 多礼貯水池周辺

ニホンアマガエル、ヌマガエルのほか、沖ノ谷池、大堤池、鐘崎堤池でニホンアカガエルが確認されている。周囲を山に囲まれた良い環境であるが、水田の多くは減反の対象となっているようである。

(7) 孔大寺山

中腹の孔大寺神社手前の谷でブチサンショウウオの幼生を見たという情報があるが、確認できなかった。両生類は普通種しかいないが、やや北方の小路ヶ谷池にはニホンヒキガエル、ニホンアカガエルが産卵する。今回確認はできなかったが、その下の湿田域にカスミサンショウウオが産卵することはほぼ間違いない。

(8) 釣川中流(下)

水田域には普通種(ニホンアマガエル、ヌマガエル)しかいない。多礼側の山地にはニホンアカガエルが生息する。

(9) 樽見川上流

ニホンアマガエル、ヌマガエル、シマヘビのみ確認された。

(10) さつき松原

水田でニホンアマガエル、ヌマガエルが確認されたのみである。ただし、この海岸は比較的広く、人気が少ないなど、アカウミガメの産卵にきわめて適しており、県下のウミガメ産卵地として有名な福津市の恋の浦海岸、岡垣町の三里松原海岸に劣るとは思われない。事実、過去に江口海岸で産卵が観察されている(倉本・石井、2003)。

(11) 釣川下流

水田でニホンアマガエル、ヌマガエル、シマヘビが確認されたのみである。

(12) 遠見山周辺

ニホンアマガエルが確認されたほか、地島小学校付近にニホンヒキガエルが生息することは確実である。

(13) 御嶽周辺

水田域にニホンアマガエル、ヌマガエルが生息するほか、山地でニホンヒキガエル、アオダイショウ、シマヘビが目撃され、山麓の溜池でニホンヒキガエルの幼生を確認した。

(14) 大島北西部

水田域にニホンアマガエル、ヌマガエルが生息するほか、アカハライモリとニホンイシガメの生息が確認された。南側の溜池にニホンヒキガエルが産卵する可能性はあるが、確認できなかった。大島のカスミサンショウウオは東部に限定されているようで、この水田でも探索したが見つからなかった。

(15) 沖ノ島

両生類はいない。爬虫類ではニホンカナヘビとニホントカゲが分布する。

(16) 草崎半島

実際の調査は行っていない。半島付け根の水田は減反のせいで放棄されているが、ニホンアマガエルとヌマガエルはおそらく分布するし、ニホンカナヘビ、ニホントカゲ、シマヘビなども分布しているであろう。

C. 重要な両生類・爬虫類の分布地

調査重点地域のうち、(1) 城山、(2) 武丸周辺台地、(3) 名残の谷地田は両生類相が豊富である。また、(14) 大島北西部はニホンイシガメの生息地として注目すべき地域である。これら以外に宗像市の両生類相の豊かな地域として、以下の地域がある。

(1) 磯辺山から大穂山ノ口池にいたる山地

タゴガエルはこの地域にのみ見出された。かつて山ノ口池の奥は湿地になっており、ニホンアカガエルの産卵が見られたが、今回の調査時にはほとんど水がなく、ニホンアカガエルの産卵は山ノ口池の浅い部分にしか見られなかった。奥の谷にはミゾソバやツリフネソウが多く、湿気は十分保たれているようである。磯辺山林道に沿った谷の詳しい調査は行っていない。

(2) 戸田山山麓部の溜池・水田域

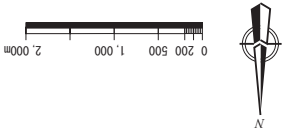
戸田池にはニホンヒキガエル、丸山池周辺にシュレーゲルアオガエル、水田域にカスミサンショウウオとニホンアカガエルが産卵する。ただし、水田の溝に溜まっている水は少なく、乾燥化が懸念される。

(3) 上八北東部山地の溜池群

野口池、伯父ヶ谷池にはニホンヒキガエルが産卵し、とくに前者は絶好の場所である。猪の浦池周辺にはニホンアカガエルが産卵し、アカハライモリも生息する。ただし、山間部の水田では減反で稲作が行われていないようで、乾燥化が懸念される。

上記のほか、用山・深田・牟田尻の山間部には、溜池を中心にカスミサンショウウオ、アカハライモリ、ニホンヒキガエル、ニホンアカガエルなどが観察されている。また、今回の調査では確認できなかったが、地蔵峠周辺の山地はブチサンショウウオとカスミサンショウウオの生息地として貴重である。

以上を総合的に考慮して、両生類の生息地域に関する評価を図 7-1 の通り判定した。これらの地域には両生類のみならず多くの爬虫類が生息しているはずである。



凡例	緑	カ	C
	青	カ	B
	赤	カ	A

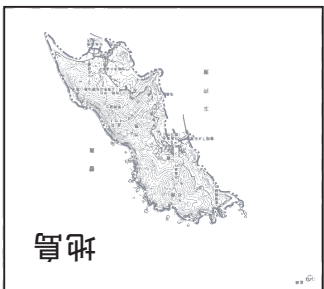
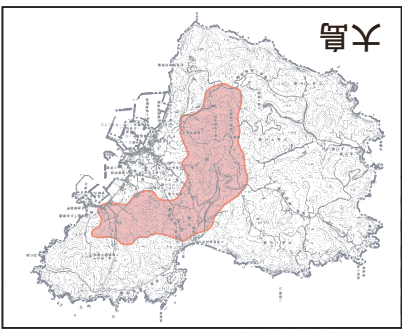
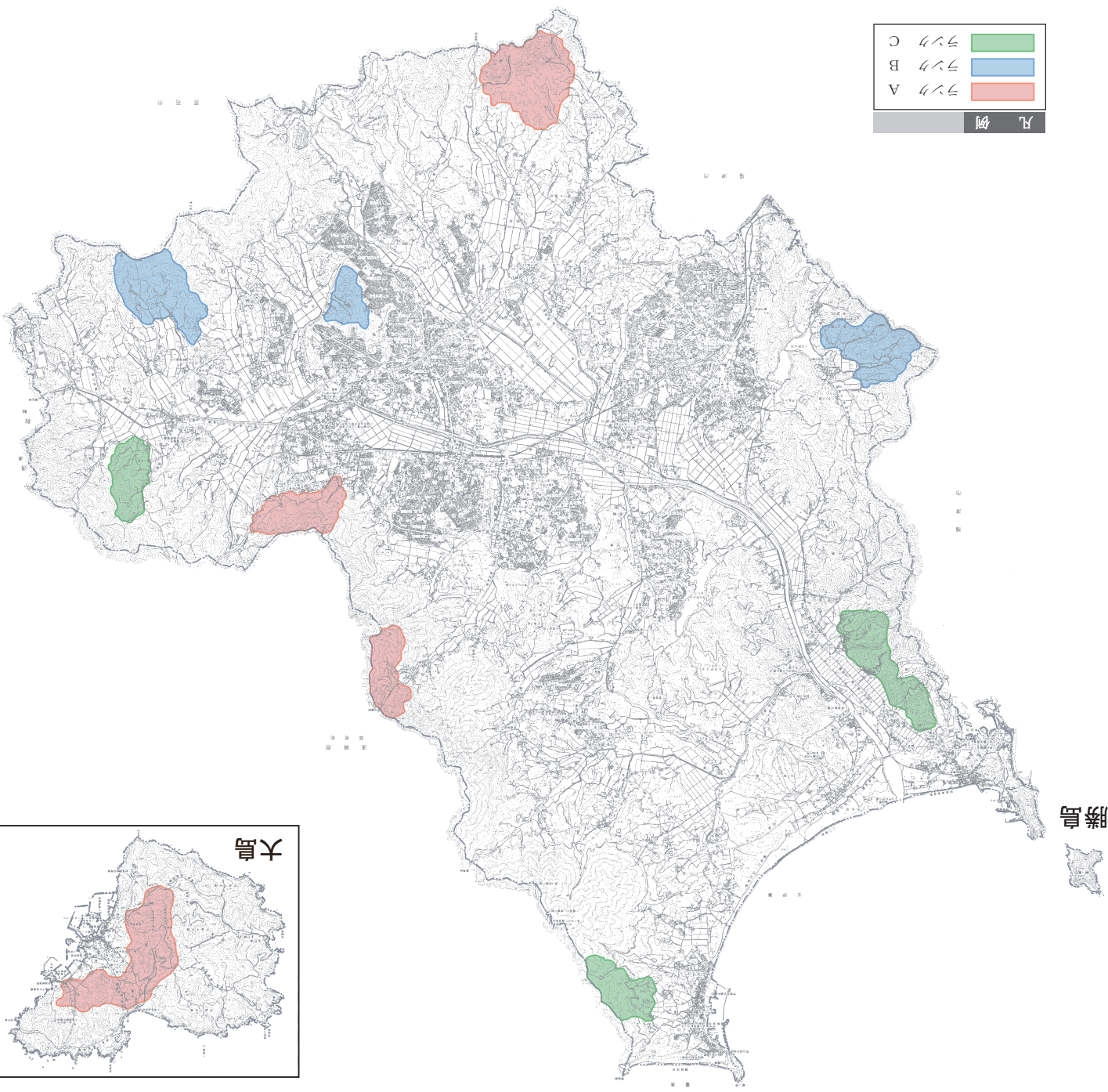


図7-1 爬虫類・両生類の評価図